

# 理性誕生の一つの道筋

二〇一八年が明治維新から一五〇年にあたるということ  
で、それを記念しようとする動きがいろいろとあるようだ。  
維新からの一世紀半を発展の歴史ととらえる向きもあるが、  
その前半が近隣諸国の植民地化を目指してアジア・太平洋洋戦  
争（最後の段階は「大東亜戦争」と名づけられた）に突入して大  
失敗におわったことは、このさい、あらためて銘記されねば  
ならない。私は一九三七年の生まれなので、いま八〇歳、そ  
の一五〇年の後半全てを生きたことになる。

一九三七年といえは「七七盧溝橋事件」がおこり、日本が「支  
那事变」と称する対華侵略戦争を全面的に展開しはじめた年  
である。この戦争は、周知のごとく、一九四一年に米英等諸  
国との開戦を経て、一九四五年に日本の無条件降伏をもって  
終わった。

## 狭間 直樹



A5判  
上巻 330頁  
下巻 310頁  
朋友書店  
【本体各 2,700円 + 税】

王耀平著／鎌田純子・山田多佳子・  
松尾むつ子・萩野脩二共訳  
羅山条約——悪力キたちが見た  
文化大革命(上・下)

敗戦時、小学校二年生だった私にとって、戦争にまつわ  
る記憶はけっして多くはない。鮮明な記憶をひとつ挙げるな  
ら、習字の時間に墨を磨ってはバケツに貯め、時間の終わり  
に屋上からそれを三階建ての大きなコンクリートの建物にか  
けたことである。先生の説明では、敵機の空襲を免れるため  
に迷彩をほどこすのだということだったが、数キロ四方にそ  
の建物ほどのものはほかになかったから、迷彩に何ほどの効  
果があったのかは知らない。敗戦後には、先生の指示にした  
がって従来の教科書の不適切部分に墨塗りをしたはずだが、  
その記憶はおぼろである。

それから七〇年あまり、日本自体の状況が無条件降伏・敗  
戦により一変したのは当然として、それにもない、周囲の  
国際環境にも驚天動地といつてよいほどの変化がおこった。

一九四九年における中華人民共和国の成立がその最たるものであろう。広大な中国の地に「社会主義」を名のる政権が誕生したのである。

人民共和国の成立からすでに七〇年、中国も世界も大きく変わった。二〇世紀は「戦争の世紀」と言われたから、新しい世紀が「平和の世紀」になってほしいと多くのひとは望んだが、目下のところ、さまざまな名分をかかげた武力衝突が止むぎざしはない。しかも「新自由主義」と称するグローバル経済のもと、富の偏在がますます加速されていることはよく知られている。

いま中国は世界第二の経済大国としてその存在感を地球規模で誇示しているが、そうなったのは七〇年の間にあまたの紆余曲折を経てのことである。その曲折のひとつが毛沢東の発動にかかるプロレタリア文化大革命であった。一九六六年にはじまり一〇年間つづいたそれは、古い封建的・資本主義文化を批判し、新しい社会主義文化を生みだそうとの旗印のもとに進められた社会改革・思想改造の運動といわれたが、実際には、毛沢東が指導権を再確立するための権力闘争であったとされる。文化大革命は政治・社会生活のすべての側面にかかわるものだったため、その影響は深刻で、発動以来すでに半世紀をへながら、それについての研究はすすんでいない。

しかし、それにまつわる歴史事象はそれなりに文章化されているのであって、ここに取りあげる王耀平著、鎌田純子・山田多佳子・松尾むつ子・萩野脩二共訳『羅山条約——悪ガキたちが見た文化大革命』は、そのような事態の歴史の意味を深く省察した好い小説である。副題には「文化大革命」がもちいられているが、実際にはその一部分であった「五七幹部学校」（後述）が舞台となっているのである。

「羅山」という地名を知っている人は少ないだろう。河南省の南辺、湖北省との省境に位置し、県庁所在地の羅山は京漢線の信陽駅東方約五〇キロメートルばかりのところにある。羅山はそれなりの歴史をほこる町だが、中国近代史上の名所とはいえない。そこがこの小説の舞台となったのは、毛沢東が最晩年に発動した「文化大革命」にとって重要な役割をになわされた「五七幹部学校」なる施設がそこに置かれたからである。「幹部」とは党・行政機関・人民団体などの指導的職位のものをさす術語で、いわゆるホワイト・カラーにあたる。

「五七幹部学校」は、毛沢東の一九六六年五月七日の指示にもとづき、「幹部」を農村に派遣して人民（農民）に学ぶことにより官僚主義・教条主義的な仕事をあらためさせようとする機構としてつくられた。その企図は壮大であつ

たが、人民にまなぶ「方法」を確立できないまま、ほとんど見るべき成果をあげることなく、数年間でその幕を閉じた。一種の「失業対策」だったと評するむきもあるが、実際のところ、そんなものだったのであろう。

河南省の羅山に設置されたのも、首都北京のある種の幹部たちを引き受ける「五七幹部学校」の一つである。幹部の子供たちも父母とともにやってきて、親たちの幹部学校に付設された形の学校（それも「五七幹部学校」と呼ばれているのだが）に席を置き、そこを舞台に日常生活をしていた。

羅山に設けられたものとしては、そのような分校ともいうべき附属の施設が七つあり、おたがい縄張り争いの「文闘・武闘」に明け暮れていたという。その勢力の強弱は基本的に実動部隊である生徒数の多寡に対応するものだったらしい。

本書は全二十二段よりなる。そこに登場する「悪ガキ」の年齢幅は一九五〇年代後半の生まれで、一九六九年当時、小学校の高学年か中学生といったところである。「五七幹部学校」で数年間の共同生活をしたあと羅山をはなれるのだが、かれらの多くはその後のほぼ三〇年間、相互の交流がほとんどないまま別々の人生を歩んでいる。しかし、ばらばらなかれらを結びつける精神的な紐帯として、本書の主題である『羅山条約』というものがあつたのだった。

「羅山条約」とは羅山の七つの「五七幹部学校」で生活する生徒たちの代表が一九七〇年代のはじめにむすんだ、毛な暴力抗争を止めようという内輪の「とりきめ」である。時を経て、その内容は関係者にも曖昧になっていたのだが、あるきっかけから、方一菲なる若い女性記者がそれを調査・探索せねばならなくなる。方氏が数年かけて精力的に活動し、初步的に定稿を書きあげたあと、知人の王耀平なる作者にそれを完成するよう依頼してできあがったのがこの小説なのである。

本書の執筆姿勢は、文化大革命という大きな歴史事件を遠景に見据えながら、羅山の「五七幹部学校」という小さな舞台で活躍する「悪ガキ」の生態そのものをいきいきと躍動的に描くことで一貫している。登場人物はきわめて多くその人生は波乱に富んでいる。基本的にロー・ティーンに属していたかれらがそれぞれに発露し行動に実態化するエネルギーは、実現の形態はそれぞれちがうにせよ、みなほとんど天衣無縫としかいいようのないものである。

たとえば暴力の発揮である。刑法がまだ整備されていなかったこと、またかれらが未成年であったことを考慮にいれても、闘争のための武器は生命の危険におよぶものが多くつかわれ、たし、その使い方に自制的な配慮が見られることはあまりな

く、実際に殺人にまでいたったこともいくつか明記されている。その有様は同時期における日本の同世代の「悪ガキ」の暴れぶりとはほとんど比較のしようもない。

男の子の乱暴ぶりは言うまでもないだろうが、驚くべきは女の子も負けていないことである。普段の生活では男女のけじめははっきりしているのだが、ある時、下校中の女子三人組に男子の集団がちょっかいを出し、一人の子に「クズ」呼ばわりをした。悪口の応酬が昂じて、いきり立った女子側は護身用の鈍などをふるって男子におそいかかるにいたる。男子側も手のとどく武器をとって立ち向かうのだが、結局、女子の三人はかなりの重傷を負って病院の世話になることとなる。大けがをしての敗北である。しかし、骨折をしたそのひとは「そのうちに治るから」と、平然として他の重傷者をなぐさめる。そこには敗北必至の武闘につきすんだこと自体にたいする自省といったものはかけらもない。これはまさにエラン・ヴィタルそのものであって、そこに漲っているのはほとんど無知にちかい恐れ知らずの精神だけである。しかし、そこにやるべきことはやったという爽快感が溢れていることは確かなのである（第八段）。

本書には、毛沢東の軍事思想に通暁してそれを羅山における分校間対立の勢力あらそいに活用するにとどまらず、「ミヤ

ンマーに行つて全人類を解放する戦闘に参加しよう」と呼びかけて応ずるものがないまま、一人で苦心惨憺の大旅行（戦闘）をおこなつた変わり者が登場する（第七段）。また、日中戦争中において最大の意義をもつた一九三八年秋の武漢攻防戦における羅山戦線の軍事的意味についての興味深い分析もある（第五段）。また北京における日常生活にふかく踏み込んだ具体的な記述、たとえばコロギの捕獲・養育・闘争・売買についての話（第十六段）などは、読んでいてつい引きこまれてしまう。しかし本筋はあくまで、羅山における「五七〇幹部学校」間における「悪ガキ」たちの内部対立と、時に殺人にまでいたる、それなりの権謀をつくした闘争である。そして、そのすさんだ状況の不毛性に「悪ガキ」たちが自身が気付き、それを自分たちの力で克服してむすんだのが「羅山条約」なのである。

最後（第二十一段）で明らかにされる「羅山条約」は、煙草の巻紙に小さな字で書かれた以下の文言である。

北京の好漢、羅山で鍛錬

戦い止めて、互いに侵さず

無駄な争い、馬鹿な事

みんな兄弟、騒ぎはもう止め

羅山で締結、これで決まりだ！

署名締結者は七つの分校の代表で、のちにかれらは「羅山七雄」と呼ばれた。それまで日常的につづいてきた「無駄な争い」をやめようというこのとりきめ(条約)に「七雄」が署名を決意したのには、文案を考えた人物(任天亮)が自分の腕を高速運転の機械に突っ込むという無茶苦茶な自己犠牲の精神を披露して、人びとにせまるという一幕があつてのことだった(第二段)。

上掲の「羅山条約」が遺された史料にもとづいて読みあげられたのは任天亮の告別式においてであった。式の参会者は、三〇年ばかり前の締結時とおなじく、一句ごとに「ウラー」と雄叫びをあげたというから、かれらがながい時間をこえて心情における「つながり」を持ちつづけたことは明らかである。式の参会者は千人を超えたとされる。市井の無名人士のものとしては破格とされるこの葬儀こそ、むかしの条約を自分なりに心にかけてその後の人生を過ごしてきた人びとにとつて、くもりなく表明できるかけがえのない「よすが」だったのであろう(第二十一段)。

本書に描かれた話は、いわゆる常識から見ると、「バカ、滑稽」であり、「無知、幼稚」なものでしかないに見える。

しかし著者は、それこそが中国の歴史を真にささえた内実であり、名もない庶民の生活の実態であつたことを見てほしい、と訴えているのである。歴史をつくっている小さな記憶の断片のなかにふくまれた意味を考えさせようとしていると言ってもよい。

そのような意図をよく理解してのことであろうが、序文筆者の一人は本書のなかに、覚醒した人間性がケンカばかりの非生産的な「体制」を刷新したことの象徴的な意味を見いだしている。バカ、滑稽、無知、幼稚としか見えぬことがから生み出されるその反対物、理性の誕生を指摘しているのである。

しかし同時に、そのこととの関連において、未来のある日、過去の歴史が再び私たちの目の前に現れてくるかもしれないことにも作者は憂慮をかくさない。その問いかけがもつ意味は重いと言ふべきであらう。

(はざま・なおき 京都大学名誉教授)